

バリアフリー 絵本で世界に発信

愛知淑徳大生発案 3カ国語に翻訳

心のバリアフリーについて学べる絵本を、世界の子どもたちに届けたい。そんな思いから、県内の大学生が、コロナ禍でも海外にできる支援を考え、つくった本が完成した。計130冊を製本し、3カ国語に翻訳してネットでも公開した。コロナ禍で、中心となった3人は本が仕上がってから初めて直接顔を合わせた。

「みんなはこまっているひとがいたらたすけることができますか？ もしかするとみんなが知らないところでこまっているひとがいるかもしれません」

絵本はこんな文で始まっている。タイトルは「こまっているひとがいたらどうする？」。見開き13ページで、バリアフリーについて学べる。高いところに届かない背の低い「ねずみくん」と、背の高い「きりんさん」などが登場し、互いに助け合う様子が描かれている。

中心となったのは愛知淑徳大学



絵本を手がけた、左から大野真凜さん、野々山綾乃さん、山本羽奈さん。いずれも愛知淑徳大学提供

授業きっかけ コロナ禍の海外支援考える

の大学生3人で、発案したのは文学部の野々山綾乃さん(21)。企業と連携して学生がグループで企画を考える「企画立案」の授業がきっかけだった。NPO法人「アジア車いす交流センター」(WAFCA)が担当したコマで、「海外の車いすの子どもにコロナ禍でできる支援」をテーマに考えた。

絵を描くのが好きな野々山さんが「バリアフリーについて学べる本をつくり、国内外の子どもに届ける」という案を出した。授業の後に「企画だけで終わらせず、本当につくりたい」と考え、活動を始めた。

絵本のイラストも担当した。児童書を参考にしながら「文字が読めなくても絵だけで理解できるように」と意識し、シンプルな絵を描くようにした。

ストーリーや文章を考えたのは人間情報学部の大野真凜さん



絵本の表紙

(20)。アルバイト先の歯科医院で待合室にいる子どもの様子を観察していると、「なんで、なんで」とたずねる子が多いことに気づいた。子どもの好奇心旺盛さを生かそうと考え、「みんなならどうする？」という問いかけを、繰り返し使った。子どもが理解しやすいよう、動物を主人公にした。

交流文化学部の山本羽奈さん(20)は翻訳できる人を探した。友人に手伝いを頼み、日本語のほか、英語、タイ語、インドネシア語に訳した。

コロナ禍で大学で集まることができず、活動はすべてオンラインだった。週1回のミーティング以外にも、LINEで進み具合を報告し合い、作業を進めた。3人は、完成するまで直接顔を合わせたことはなかった。

大野さんは「コロナでバイトやサークルの時間があまりなかったからこそ、できたことかもしれない」と振り返る。大学の友人と会えない日々が続くなか、作業を通じて学生同士でつながっていたことは、心の支えだったという。

本は名古屋市、長久手市など県内の保育園や小学校に送られ、各国語版を、PDFで共有した。「WAFCA」のウェブサイト(<https://wafca.jp/enon.pdf>)で公開している。詳しくは、愛知淑徳大学コミュニティ・コラボレーションセンター(052・781・1151)へ。

(佐藤瑞季)